

槍 と 土 器

—— 都筑における縄文時代草創期の遺跡 ——

坂 本 彰

はじめに

「都筑^{つづき}」とは多摩丘陵を東流する鶴見川流域の古称（『和名抄』）で、およそ横浜市の北部から川崎市の西部に相当する。この地域の宅地開発は1960年代（以下19省略）の後半に大規模となり、その中で原始・古代を主とする多数の遺跡が知られるにいたった。

ここでとりあげる縄文時代草創期についても、70年代の前半まではほとんど不明であった（坂本70）。しかし70年代の後半になると、町田市なすな原（江坂他78）・横浜市花見山（坂本他79）・川崎市黒川東遺跡（稲村他80）が相次いで調査され、この時期の様相がはじめて明らかにされた。開発に伴う発掘調査は80年代にはいと激増し、横浜市能見堂（小宮他84）・同長津田地区遺跡群（伊丹他88・89）などの資料が追加された。

花見山遺跡の調査を担当した筆者は、昨年ようやく報告書（坂本他95）を刊行したが、いくつかの課題を残してしまった。そのひとつが、鶴見川流域における花見山遺跡の位置付けである。この課題を果たすためには、まず周辺に分布する同時期遺跡の実態を把握する必要がある。ところが地域史的な視点から草創期にふれたものとしては、前掲黒川東遺跡報告中の村田論文があるにすぎない。

そこで小文では、これまでに知られた本地域の遺跡・遺物を整理し、若干の比較検討をこころみることとした。1で月出松遺跡・2で能見堂遺跡その他の資料を紹介し、3でそれらを含めた遺跡・遺物を集成し、4で花見山の背景にふれる。ただし花見山遺跡の資料はここに収めるには余りにも分量が多く、かつ報告書刊行後日も浅いことからすべて割愛した。しかし小文は、すべての面で同報告を前提としている。また本年3月3日、横浜の県政総合センターホールで開催された「考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る」の一環として、同趣旨の発表を行なった（坂本96）。先の花見山報告ともども、合わせて参照していただければ幸いである。

1. 月出松遺跡（図1・2）

月出松遺跡は港北ニュータウンの南西部、横浜市都筑区加賀原1丁目8～18（旧緑区佐江戸町・川和町）に存在していた。遺跡の主体は縄文時代中・後期の大規模な集落址で

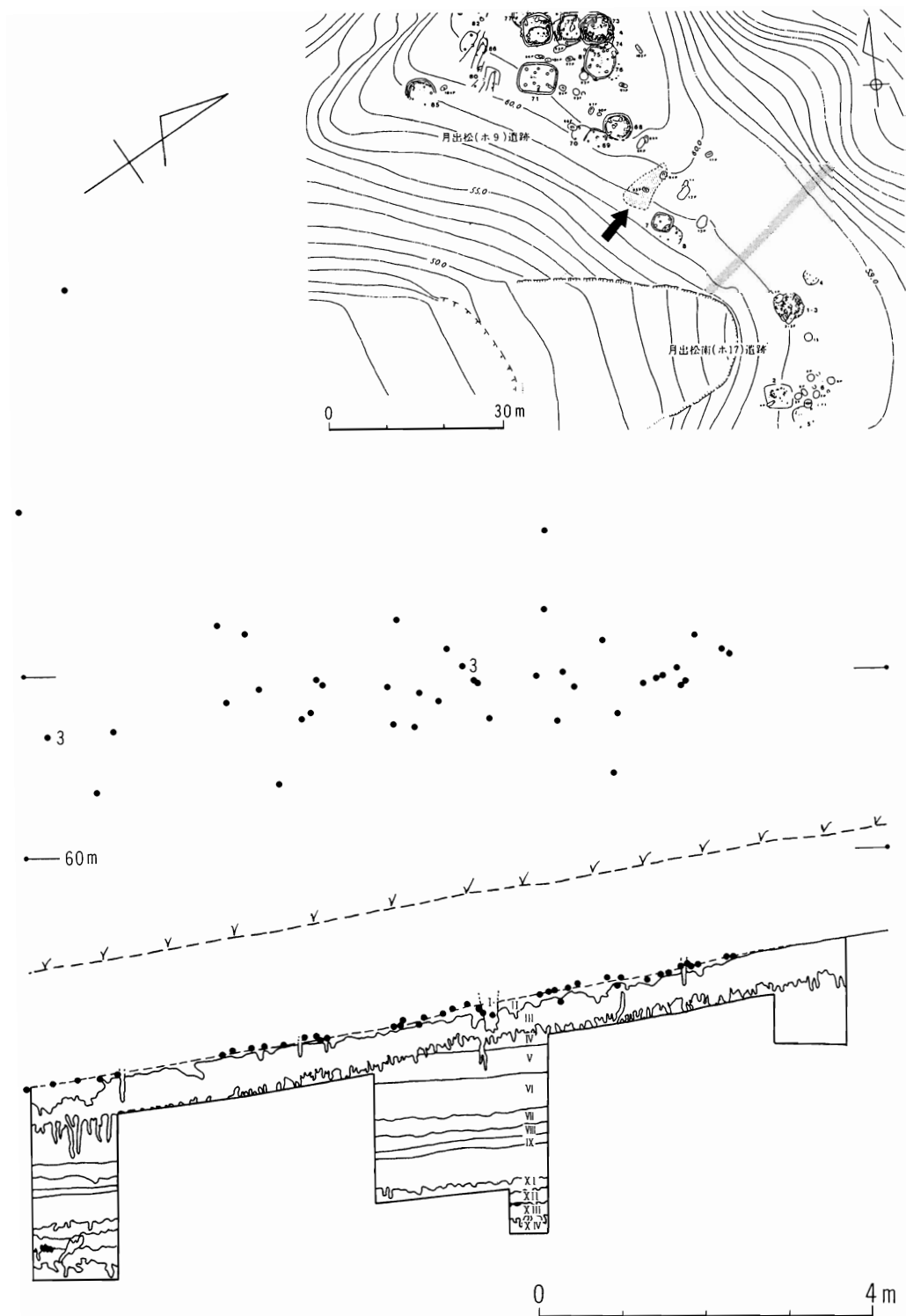


図1 月出松遺跡の土器出土状況

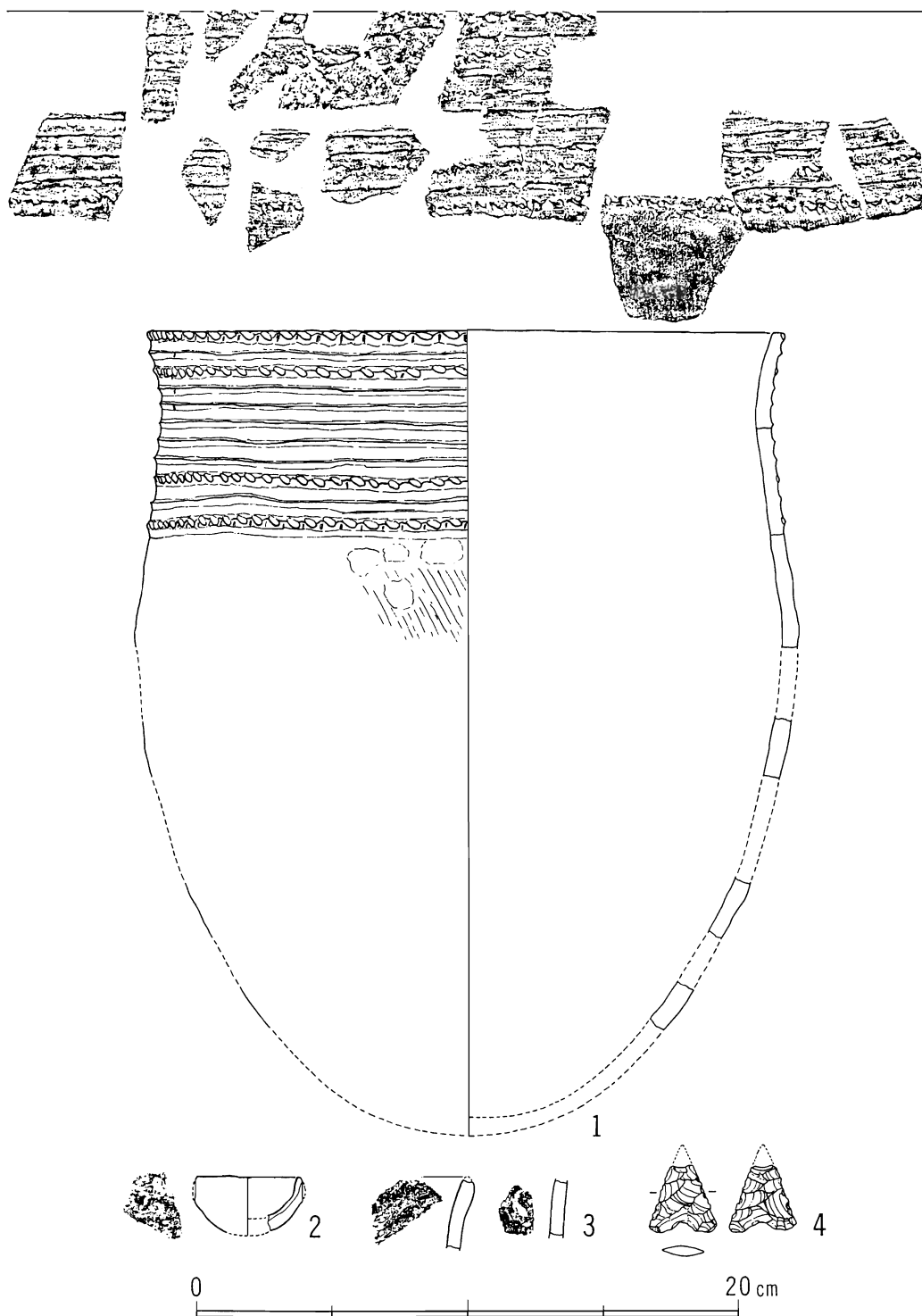


図2 月出松遺跡の土器と石器

(小宮90), 草創期の遺物は遺跡の南端部から出土した。そのうち土器片は分類・接合して復元し, 86年3月に開催された「古代のよこはま」展に出品した(坂本86a)。

遺跡は谷本川東岸の標高63mの高位台地上に位置し, 南側は池辺町方向から入り込む支谷によって画されている。台地東南部からさらに南へのびる尾根状台地は, 縄文時代住居群の東南約30mで最も狭くなる。月出松遺跡の遺構群はこの狭隘部でとぎれ, それより南側が月出松南遺跡となっている。

土器の出土地点は南側住居群と狭隘部との中間, 標高59~60m前後の南西向きの斜面最上部である。およそJ7・8・68~70号住居址, 1号炉穴, 12・88・89号土坑に囲まれた範囲で, 84・85号土坑と重複している。遺物の大半は採集したものだが, 土器片の一部は漸移層からソフトローム上部にかけて出土した。それらは東西約9m・南北3mの斜面に沿って細長く広がり, あたかも斜面上方から投棄したかのようにみえる。土器片のほとんどは1に属するが, 2・3も各1片まじっていた。なお石鏃はやや離れた地点で採集したが, 石質からみてこの時期と推定した。

遺物の内訳は, 土器が59点, 石器が1点である。土器のうちで微隆線をもつ20片と, 類似した胎土・焼成の無文18片は, 明らかに同一個体であった。他に丸みのある1片と直行する2片は別の個体で, 残り18片は判断がむずかしい。したがって3個体あることは確実で, 無文小片が別個体としても, 全体で数個体にとどまる。

1は口径約4分の1, 胴上部約2分の1相当分の破片があり, 1片の大きさは4~5cm大以上である。一方胴下半部は2~3cmの小片が多く, まったく接合しなかった。器形は大型の深鉢で, 口縁は平縁である。口縁より約3cm下を屈曲点として, 浅くくの字状に外反し, 以下はゆるくすばまっていく。底部は丸底としたが, 乳房状尖底の可能性もある。胎土は白色粒子を多く, 小石・繊維を少し含み, いわゆる獣毛痕はみられない。焼成は堅く良好で, 残りのよい表面上半部は黄褐色を呈し, 下半は表面が剥離して赤化している。内面は全体的に保存がよくて黄褐色, 断面は黒褐色をなす。整形は一辺5~6cm前後の粘土版を貼り合わせたもので, 大きさのわりには薄手の作りである。器面は指の指圧痕を残して全体的に凹凸し, 表面は右下がり・内面は横方向に指で調整している。

文様は並行する11条の微隆線が, 口縁から7.4cm下までの間に横走している。隆線の間隔は平均6mm前後, 高さは1~2mmで, 線の上方が急傾斜, 下方が緩傾斜をなす。隆線の間には細く鋭い沈線が横走し, 所々にヘラ先による沈線状の浅いくぼみもある。したがってこの隆線は櫛状工具(佐々木73)によらず, 上方から1本ずつ押引きされたもので, 先端が丸みをもつ工具によっている。工具・砂粒痕の方向はすべて右→左をしめしており, 口縁を左側に置いて手前方向に引いたことが想定される。

隆線の1・3・9・11条には, すべて右下がり方向の刺突が加えられている。1・3・11条の刺突は全周するが, 9条には施されない部分があるらしい。断面が丸みをもつ棒状

工具で隆線上を連続刺突した結果、はみ出した部分が小波状をなしている。1・11条では波状の山の直下に、先が角となる鋭い刺突を加えている。その1単位は幅1mm、長さ2～3mmの縦長で、2～5・9条の一部にもこの小刺突が施されている。

2は1片のみで、径4cm・厚さ5mm・高さ2.2cm前後の超小型鉢形土器である。表面の一部が剥離し、表面は黄褐色、内・断面は黒褐色をなす。胎土は白色粒子を含み、焼成は良好である。成形は内外2枚の粘土板を貼合わせて押圧し、丸みをつけて作り出している。

3は口縁と胴部が各1片であり、接合しないが同一個体と思われる。器形は口縁部が緩く外反する深鉢形で、厚さ5mm、高さ・径共に10cm以内の小型土器であろう。丸みをもつ口縁端は欠失し、表・内面は黄褐色、断面は黒色をなす。胎土は白色粒子を含み、焼成は良好である。表面に繊維束先端部らしき痕跡が2ヶ所、内面に斜め方向の調整痕がみられる。

4は横長剥片を素材とし、基部に抉りをもつ石鏃で、長さ・幅共に2.5cm、厚さ4mm、重さ2.1gある。本来の長さは3.3cm前後、表面は灰褐色の安山岩製である。

本遺跡の土器は個体数が少ないにもかかわらず、大きさにバラエティがある。1の器形は花見山101・118（坂本他95）、山形県日向洞窟（佐々木71）、青森県表館(1)遺跡（三浦88）と類似している。容量は約9ℓを計り、花見山1（10ℓ）と102（8ℓ）の中間で、隆線文土器大型品の一代表となろう。一方2の超小型土器は、花見山68・69、大和市上野遺跡第2地点（戸田・相原84）に類例がある。これら大・超小型品の存在は、隆線文土器の時期すでにさまざまな器形が作られていたことの証しである。器形の分化は土器が用途に応じて製作された、すなわち縄文土器が当初からセットとして成立していた可能性を物語っている。また器形や文様の点からみると、1の様相は花見山102・横浜市宮之前（伊丹他88・89）・川崎市栗木IV（増田他78）にきわめて類似しており、花見山3式に位置付けられる。

本遺跡は能見堂・花見山・なすな原などと異なり、高位台地の斜面上部に形成されていた。剥片や焼土・炭化粒なども見られず、居住の痕跡はきわめて薄い。それにたいして後述の能見堂遺跡では石器が製作されており、居住があったことは明白である。両遺跡は一つの尾根状台地の基部と中間という位置関係にあり、距離はわずか500mにすぎない。また能見堂の土器も花見山3式で、本遺跡と同時期である。こうした状況からみると、本遺跡は能見堂遺跡の居住者によって形成された可能性がある。遺跡の性格としては、一時的立寄地とみるのが妥当であろう。

2. 能見堂遺跡と周辺の石器（図3・7）

能見堂遺跡は、横浜市都筑区加賀原2丁目12～18（旧緑区佐江戸町）に存在していた。遺跡の主体は縄文時代前期の集落・弥生時代中期の方形周溝墓群・古墳時代後期の横穴墓

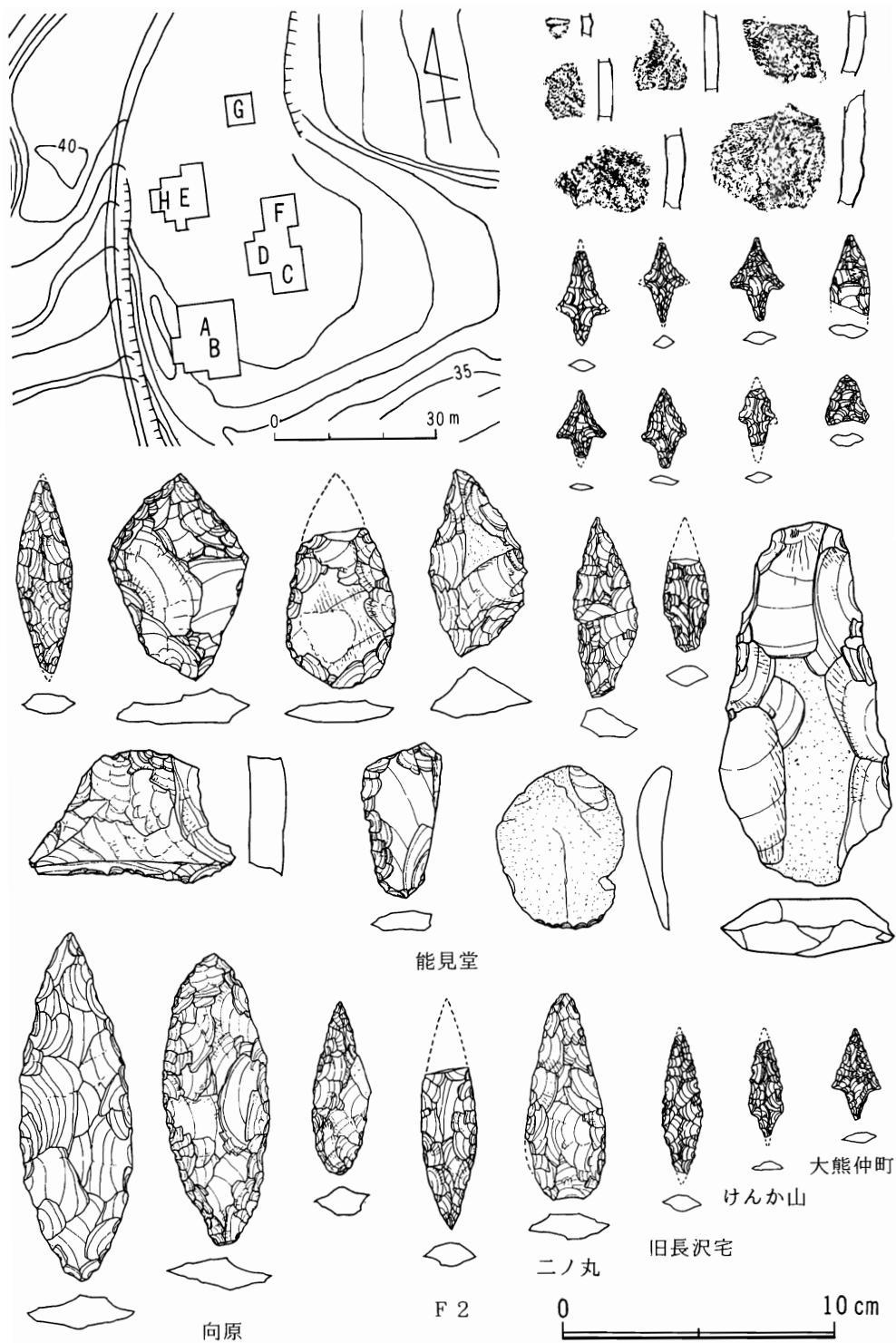


図3 能見堂及び周辺遺跡の土器と石器

群などで、その概要は既に公表されている（小宮他84）。遺跡は谷本川の東岸にそって南北にのびる台地主脈上に形成され、東から入り込む支谷で南北に二分されている。草創期の遺構と遺物は、標高39mを測る南側台地の中央部に存在していた。

検出された遺物集中地点は8ヶ所（A～Hユニット）で、南北約50m・東西約30mの範囲内にある。各ユニットの位置は、南側斜面が始まる所にA・B、中央東南部にC・D・F、中央西北部にE・H、北側支谷頭部付近にGである。A・D・G・Eを結ぶ内側からは発見されず、南北に長いドーナツ状に分布している。層位はいずれもソフトローム上面を主とし、一部はハードローム上部まで及んでいた。各ユニットの遺物分布は径4～5m・厚さ40～50cmの皿状をなしていた。ナイフ形石器が出土したB以外の7ユニットは、縄文時代草創期の所産とみられている。またHユニット内に礫群が1基みとめられた。出土遺物は約2200点を数え、主体は石器・剥片で、土器がわずかに伴っている。ユニット別にみると、最も少ないのはFで16点、最も多いのはEで1030点ある。

石器は尖頭器が主体をなし、器種と数は槍13・刺槍6・鏃2・搔削器4・斧1・残核1などである。槍はいずれも中・小型で、細身のものは丁寧な両面加工がなされ、最大径が中位にあり、一点は逆刺状を呈する。幅広のものは断面厚手と薄手とがあり、前者は左右非対称で、やや粗雑に調整されている。後者は大型剥片の周縁を調整したもので、最も幅広の形態をなす。それ以外に未成品らしきものが2点含まれている。刺槍はいずれも小型で逆刺が発達し、身よりも茎の方が長いものもある。鏃は三角だが基部は浅く凹んでおり花見山とはやや趣を異にし、1点は未製品と思われる。搔削器は主に剥片の側縁部に刃をつけたもので、刃部の厚いものは認められない。斧は先端裏部を調整加工した片刃石斧で磨痕は見られない。残核は一面に自然面を残し、打面は複方向を呈する。

これらの石質はチャートが主で、流紋岩（凝灰岩）・頁岩・ホルンフェルスなどもある。剥片類の大半はせいぜい2～3cmの小型品が多く、それらの石質も類似した構成をなしている。形態もとくに整っていないが、そのうち数10点には部分的な打痕が見られ、不定形の石器ともいえよう。注目すべきは安山岩製で、長さ7～8cmもの比較的大型剥片の存在である。本遺跡の定型石器中には安山岩製品がなく、また花見山の剥片中にもこうした大型品は少ない。したがってこれらの大型剥片の存在は、本遺跡の一特徴と思われる。

土器は表採も含めて約20片出土したが、ほとんど3～4cm未満の小片である。いずれも厚さ5mm前後の薄手で、焼成は堅く良好である。色調は黄褐色で、獣毛痕は認められず、胎土に白色粒子を含んでいる。大半に文様はなく、最も小さい1片にのみ細い微隆線が横走している。個体数は確定できないが、破片の色調などから少なくとも2～3個体はあると思われる。以上の様相からみて、これらの時期は花見山3式に比定しうる。

このように能見堂遺跡は月出松遺跡から南にのびた低位台地上に立地しており、そこでは花見山3式の段階において、槍・刺槍・搔削器などが製作されていた。製作址は4プロッ

クに分かれており、槍などの様相は花見山とは異なっている。伴出した土器の量もきわめて少なく、ある1時期に限定できる。花見山に比較すれば、より短期の居住址であることは疑いない。なお、本遺跡の整理報告は担当者によって現在進行中であり、この内容は必ずしも最終的なものではない。

その他に港北ニュータウン内では、槍が百崩・七ッ塚・三の丸・八幡山で、刺槍が山田大塚・西ノ谷貝塚・石原・東方13・三の丸で、斧が大塚で出土している(図7)。また向原遺跡ではホルンフェルス・安山岩・流紋岩製の槍3点(図3左より)が、ソフトローム層及び上面から発見されている。いずれも両面加工で中央部付近に最大径をもち、本地域の先土器時代終末期の基準となった。一方F2遺跡では能見堂に類似した流紋岩製の細身の槍、旧長沢宅遺跡ではそれを一回り小さくしたチャート製の槍、二ノ丸遺跡では基部に最大径をもつ安山岩製の槍、けんか山遺跡では黒色頁岩製の刺槍、大熊仲町遺跡ではチャート製の刺槍がいずれも単独出土している(『全遺跡調査概要』による)。

3. 遺跡と遺物の様相(図4～12・表1～3)

鶴見川は町田市小山田町を源とし、横浜市鶴見区で東京湾に流入する。延長42.5km・流域面積235km²の一級河川である(横浜市下水道局河川計画課92)。ここでは鶴見川流域を中心とし、南接する帷子川流域および北接する多摩川南岸域(三沢川以東)をも対象とした。多摩ニュータウンの中核をなす乞田・大栗川流域は、分布図に入る範囲で遺跡の位置を落とした。なお入江川の流域は、便宜上帷子川流域に含めた。遺物集成図は比較的真とまりのある長津田遺跡群・なすな原遺跡を優先し、その後に単独出土品および隣接地域をかかげた。これらと前記『花見山報告』を合わせれば、鶴見川流域および周辺における現段階の先土器時代末～縄文時代草創期の資料はほとんど網羅しえたと思われる。

ここで知られた遺跡数は、鶴見川流域が86ヶ所、多摩川南岸域が30ヶ所、帷子川流域が7ヶ所で、合計123ヶ所となる。それらの分布をみると一様ではなく、港北ニュータウンや鶴見川上流の大・中規模開発地区に集中している。鶴見・帷子川下流の比較的早く市街化した地域、あるいは徐々に開発が進行する多摩川南岸域では分散している。これは分布状況が調査の有無によって左右される事を意味しており、本来の分布は前者の方がより実態に近いことは明らかである。長津田・金井原・川島谷・小山田・黒川地区では舌状台地ごとにそれぞれ1～2ヶ所ずつという稠密ぶりで、これらが一般の在り方とすれば流域全体では数100ヶ所の遺跡があると見なければならぬ。面積の点からすれば、多摩ニュータウン地域(30km²)では60ヶ所(東京都埋蔵文化財センター92)、港北ニュータウン地域(25km²)では約20ヶ所で、1km²につきおよそ1.5ヶ所となる。鶴見川流域丘陵部の面積は約165km²(前掲書)あることから、遺跡総数は250ヶ所前後と想定される。したがって現在

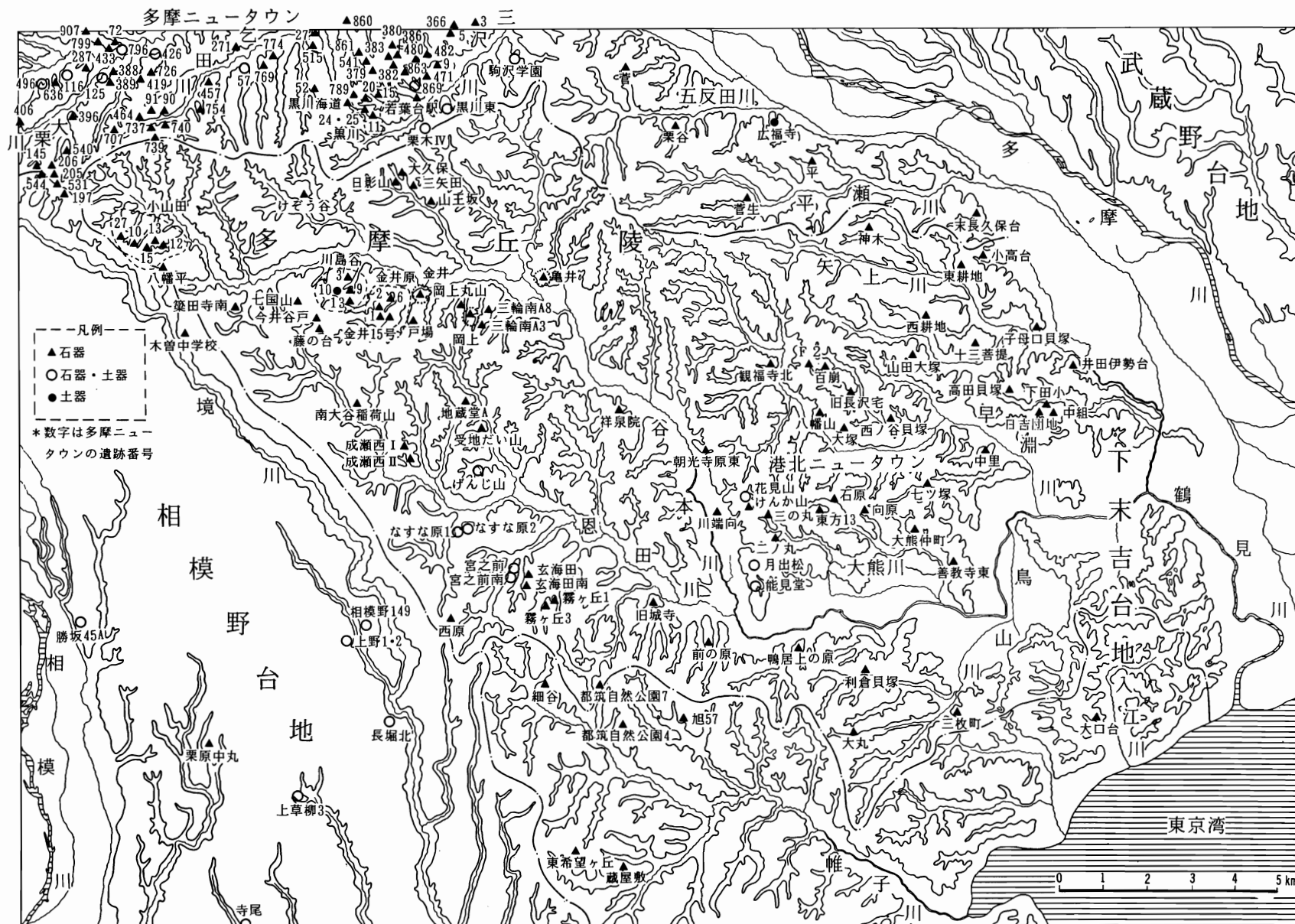


図4 草創期遺跡の分布

表 1 鶴見川流域の遺物

図	遺 跡 名	土器	槍	刺槍	斧	その他	文 献
1・2	花見山	123	30	54	8	各種多数	坂本95
	月出松	3				鐵 1	本文
3	能見堂	2~3	13	6	1	鐵 2・搔 4 ・剥片多数	“
“	向原		3			核 1	“
“	F 2		1				“
“	二ノ丸		1				“
“	旧長沢宅						“
“	けんか山			1			“
“	大熊仲町			1			“
5	玄海田		1	1			伊丹89
	玄海田南			1			伊丹教示
5	宮ノ前	4	1	4		鐵 2・鏝 1 ・剥片	“ 88
“	宮ノ前南	2	1	1	3	刃・剥片	“ 89
6	なすな原 1	8	7	1	2	鏝 2・刃 1	中村78・町田84
“	“ 2	3	2	6		剥片	“
7	神木			1			村田68b
“	東耕地			1			“
“	井田伊勢台			1			原89
“	山田大塚			1			石井90
“	西ノ谷貝塚			4			坂本87
“	下田小		1				松村74
“	日吉岡地		1				大坪94
“	子母口貝塚		1				森田73
“	西耕地		1				村田63
“	高田貝塚		1				浜田95
“	観福寺北		1				平子89
“	百崩		1				坂本86
“	十三菩提		1				樋口71
“	大塚				1		武井94
“	石原			2			荒井74
“	東方13			1			坂本72
“	七ッ塚		1				“ 87
“	三の丸		2	1			“ 85
“	川端向		1				“ 93
“	朝光寺原東				1		“ 89
“	八幡山		1				伊藤90
“	中組		1				岡本58
“	中里					細刃	奥平80
“	善教寺東				1		前川教示
8	三矢田		7	2			伊藤91
“	日影山		3	3			小杉89
“	大久保		2	2			伊藤91
“	山王坂			1			関根89

* 土器の個体数その他報告と異なる場合は、筆者の判断による。

* 石器点数が記載してないものは、1 とした。

* 報告者名は、1 人のみ記した。

表 2 多摩川流域の遺物

図	遺 跡 名	土器	槍	刺槍	斧	その他	文 献
10	栗木IV	2	1				増田78
“	栗谷		1				禿74
“	駒沢学園	1	1	2		搔 1	呉地89
“	黒川東	2	2	1	1	鏝 1	稲村80
“	広福寺	1					村田68a
“	菅			1			東原78
“	平			1			坂本72
“	末長久保台			1			東原75
“	菅生		1				村田78
“	若葉台駅			1			“
11	黒川海道		3	6		鏝 3	“
“	多摩789		2				川田95
“	黒川20		1	2			谷本93
“	“ 24・25		1				“ 94
“	“ 11		1				小薬91
“	“ 15		2				“
“	多摩 3		5				館野89・伊藤91
“	“ 386			3			館野89
“	“ 5		3	2			石川87
“	“ 366		5	3			館野89
“	“ 480		1	5			“
“	“ 863		1				“
“	“ 382			3			石橋84
“	“ 869	1					東埋セ92
“	“ 471			1			“
“	“ 9		1				“
“	“ 482			1			“
“	“ 380			1			“
“	“ 383			1			“
	計	7	32	35	1		

表 3 帷子川流域の遺物

図	遺 跡 名	土器	槍	刺槍	斧	その他	文 献
12	細谷			1			寺沢75
“	都筑自然			1			橋本91
“	公園 7						“
“	“ 4			1			“ 88
“	旭57			1			奥平80
“	東希望ヶ丘					搔 1	小野塚86
“	蔵屋敷		3			搔 1	中山92
“	大口台			3			安藤92
	計		3	7			

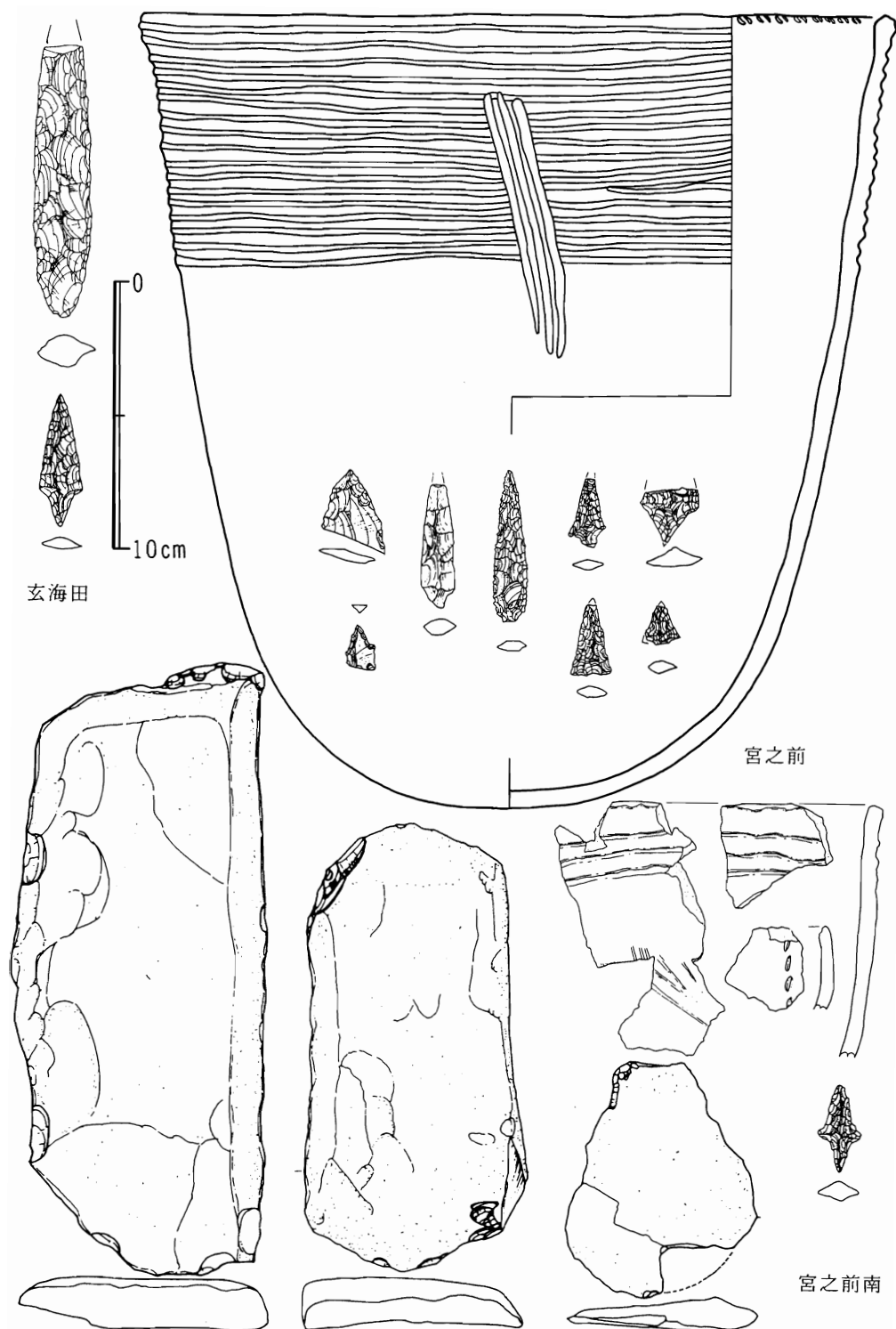


図5 鶴見川流域（長津田地区遺跡群）の土器と石器

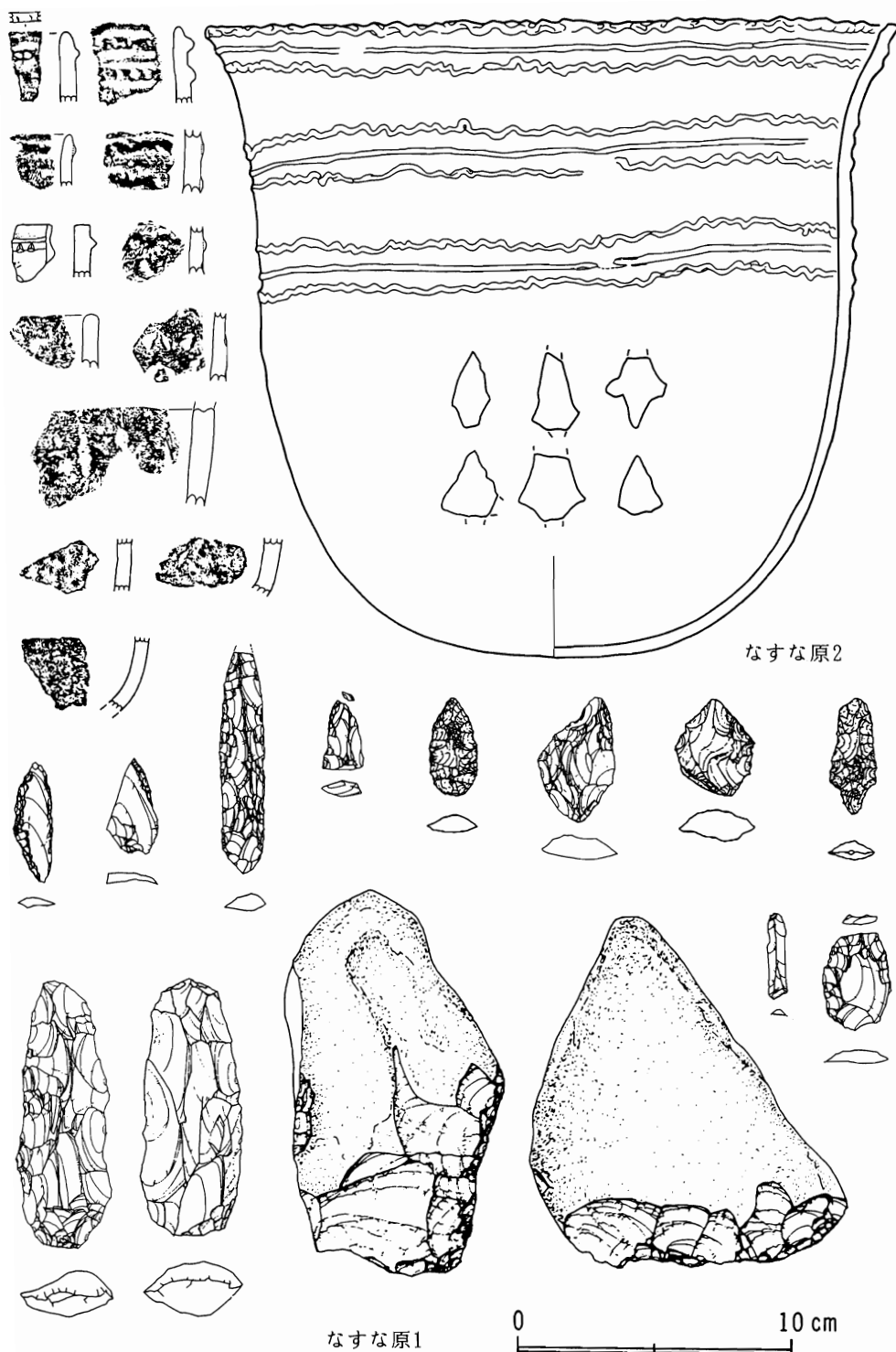


図6 鶴見川流域（なすな原遺跡）の土器と石器 ※なすな原2の石器は縮尺不詳

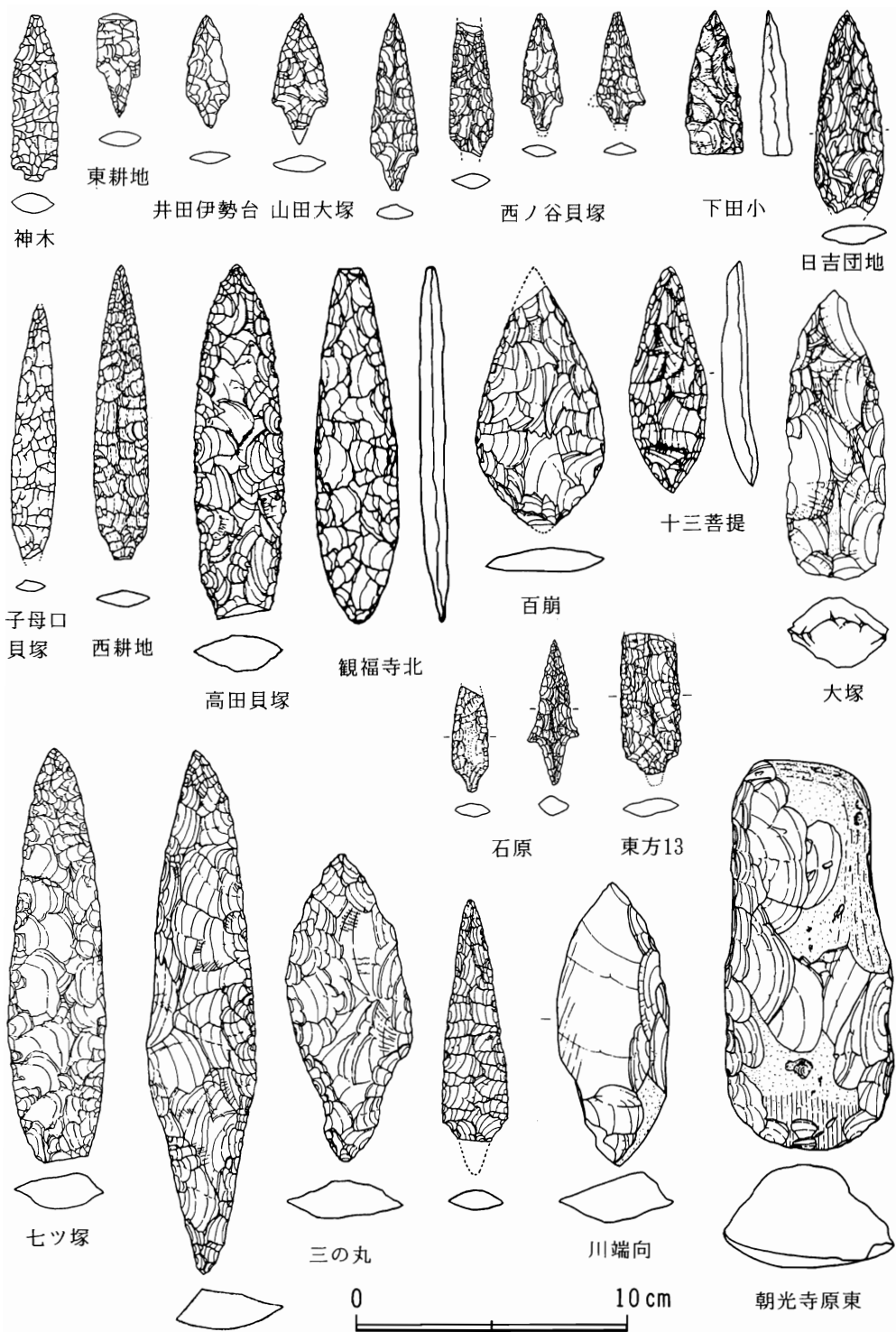


図7 鶴見川流域（下流北岸部）の石器

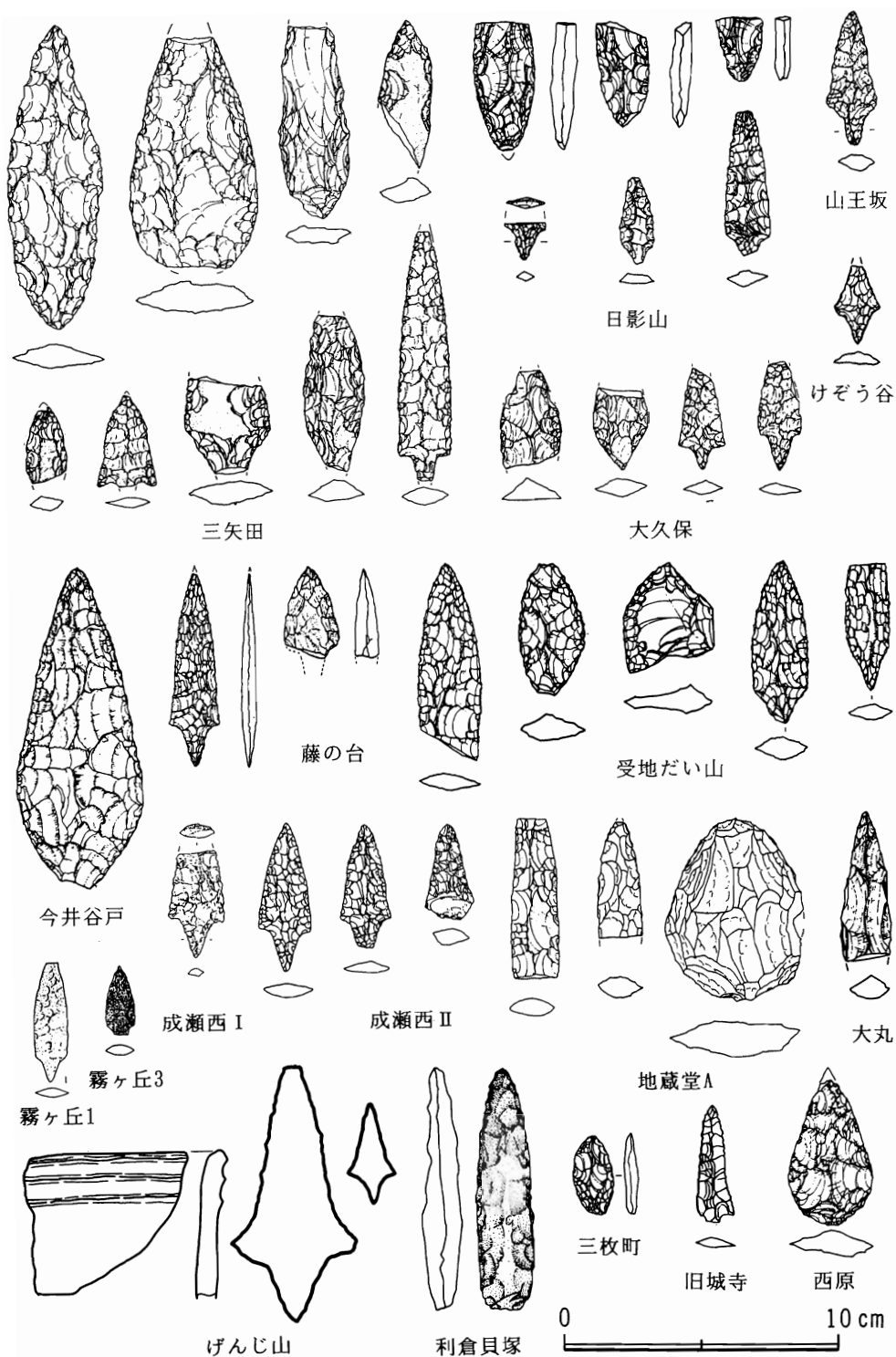


図8 鶴見川流域の土器と石器

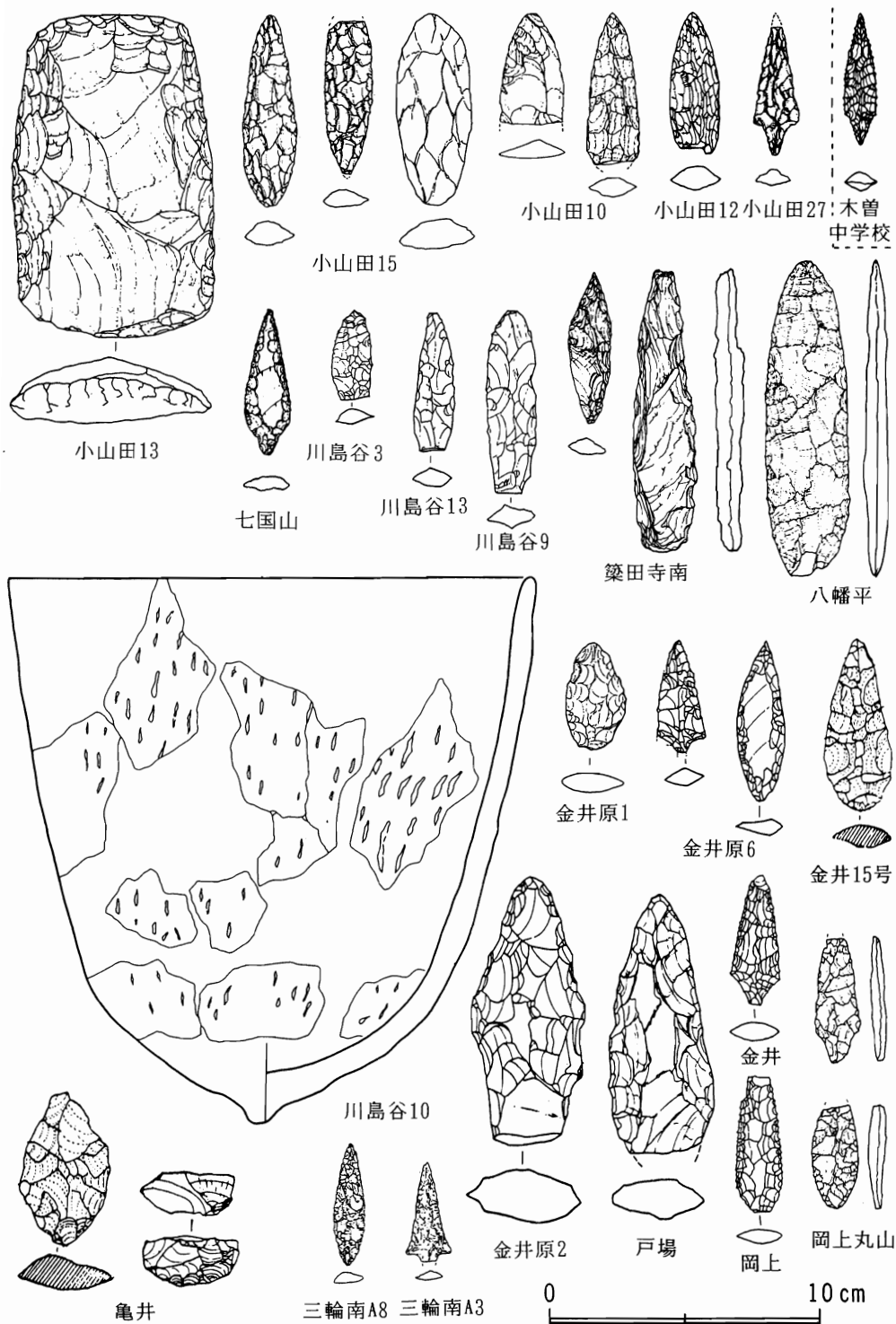


図9 鶴見川流域（上流部）の土器と石器

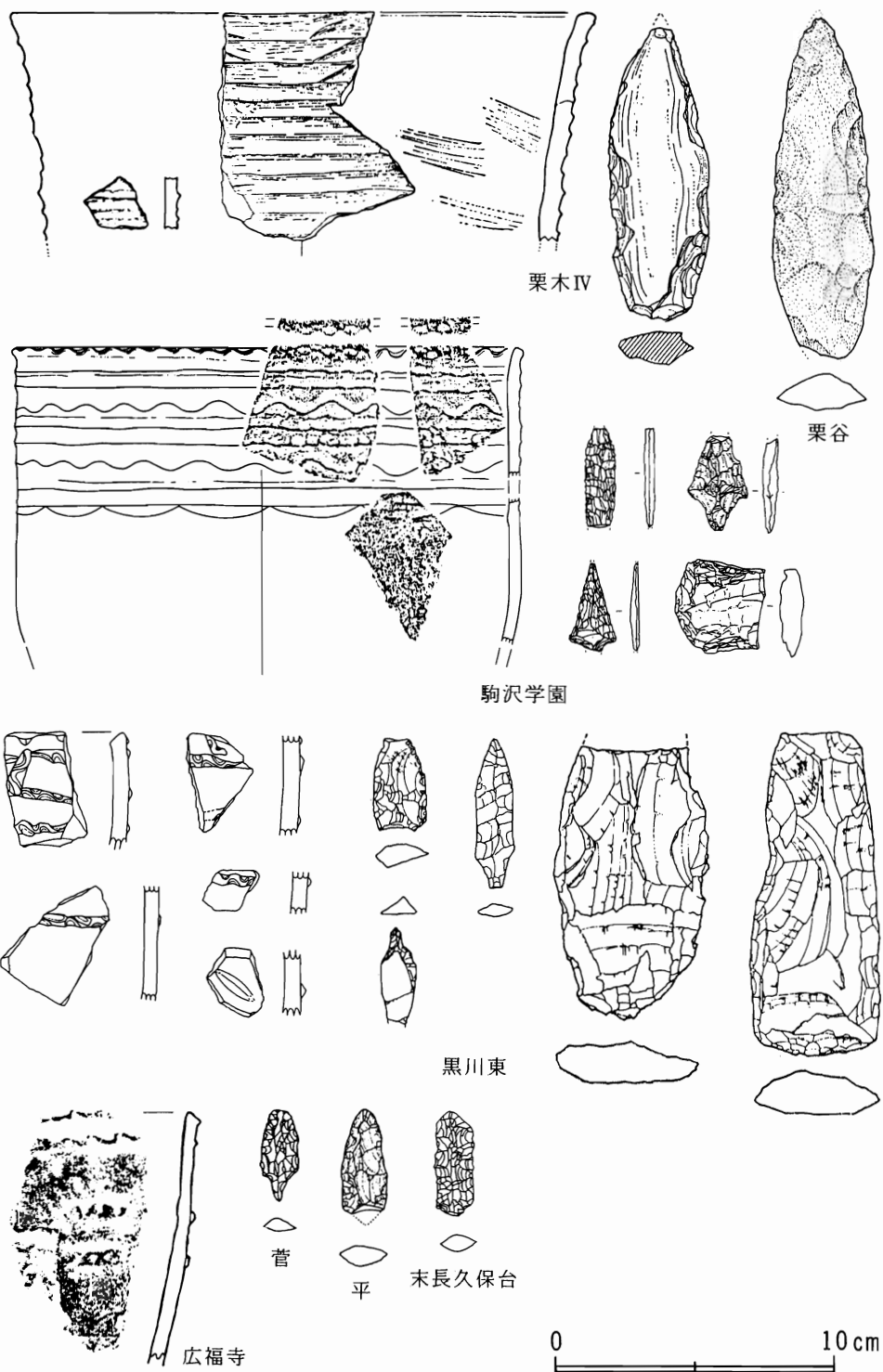


図10 多摩川流域（三沢・五反田・平瀬川）の土器と石器

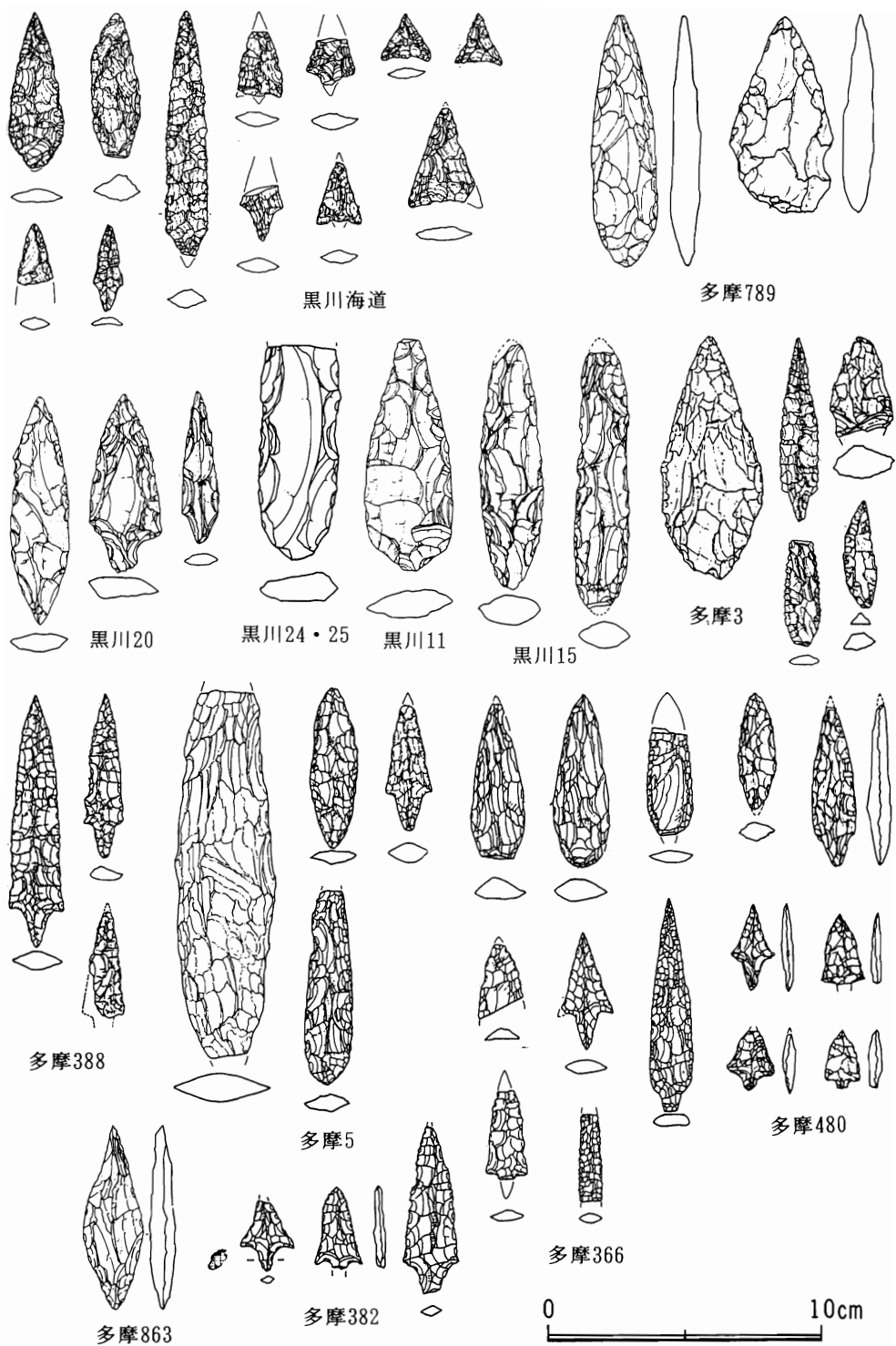


図11 多摩川流域（三沢川）の石器

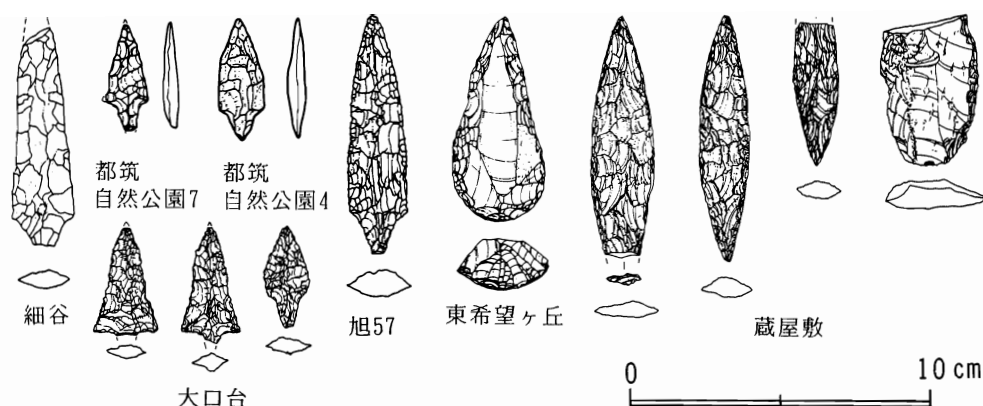


図12 帷子川流域の石器

知りえた遺跡は、本来の3分の1前後にすぎないともいえよう。

各遺跡は台地上の平坦面・斜面をとわず存在しているが、概して台地の主脈・脊梁部に少なく、台地の先端・低位部に多い。遺物のうち、石器は槍と刺槍が大半を占め、これに次ぐのは斧であるが、これらが器種別に集中する様子は見られない。それに対して土器のある遺跡は14ヶ所だが、明確な集中を示している。谷本川東岸に3（花見山・月出松・能見堂）・恩田川中流に5（宮之前・同南・なすな原1・同2・げんじ山）・三沢川中流に4（駒沢学園・黒川東・栗木IV・多摩869）ヶ所で、いずれも約2 kmの範囲内に分布している。鶴見川上流の川島谷10と五反田川下流の広福寺は単独で、前出各グループと相似た距離で離れている。

これら5つのグループはそれぞれ5～6 kmの間隔があり、あたかも各川の中流域を選んで立地したかのごとくである。ちなみに大栗川流域の3遺跡はやはり狭い範囲内に集中し、やはり三沢川グループとは同様な間隔をおいている。同様な状況下で調査された周辺の遺跡からは土器が発見されていないので、この分布状況は意味をもつものといえよう。土器の存在が長・短をとわず一定期間の居住をあらわすとみれば、各グループの位置は草創期の居住位置を示すものであろう。居住地の選定は単なる偶然ではなく、他の存在を意識して行なわれた可能性もある。後の縄文時代に地域の拠点をなす複合（大規模）集落は一定の間隔をおいて立地している（坂本87b）が、その萌芽はるかにこの時期にさかのぼることは興味深い。

遺構は花見山の堅穴と配石それに能見堂の礫群のみで、他では検出されていない。配石や礫群はどの層位にあっても比較的判別しやすいが、浅い堅穴や柱穴のみでは検出しにくいのも一因であろう。しかしそれを割り引いても、この時期の遺構は少ない。後の縄文時代には、遺構の数に比べて遺物の方がはるかに少ない事も珍しくない。したがって明確な掘り込みを伴う施設が、あまり構築されなかったといわざるをえない。

総数123遺跡の95%は完成石器が1～数点存在するのみで、遺跡といっても長期間居住したとはとうてい考えられない。これらは短期間の居住か、もしくは一時的に立ち寄ったかのいずれであろう。それに対して土器と剥片が共存する花見山・能見堂・宮之前南・なすな原1・同2などは居住の痕跡がより明確で、この時期の集落址といえよう。こうした見方をすれば、集落が存在したのは谷本・恩田川グループのみということになる。同様な視点で多摩川南岸域を見た場合、条件を備えているのは大栗川グループだけである。前二者を鶴見川中流域の一グループとすれば、この時期の集落は鶴見川中流域と多摩川南岸域に各1ヶ所ずつと存在したと考えられる。

土器は鶴見川流域全体で約150個体出土しているが、その83%が花見山である。残り8遺跡で約25個体あり、1遺跡の平均は3個体である。多摩川南岸域では4遺跡から最大8個体で、平均2個体となる。個体数の不明な大栗・乞田川グループも似たような状況と見られ、花見山以外の遺跡の平均は2～3個体である。この数字を見れば、花見山の資料がいかに傑出した存在か明らかであろう。これらの土器の説明は各報告にゆずるが、それらの時期は下記の4期に編年できる。

- ・花見山1式…花見山・広福寺・多摩796
- ・花見山2式…花見山・なすな原1・黒川東・多摩426
- ・花見山3式…花見山・月出松・能見堂・宮之前・同南・なすな原2・げんじ山・栗木
IV・駒沢学園・多摩116・同125
- ・下宿式…川島谷10

以上のように最も多いのは花見山3式期で、この時期には鶴見川上流・五反田川以外のグループでは複数の遺跡が存在する。それ以前の花見山1・2式期では、各グループに1ヶ所ずつであるが、最後の下宿式期には鶴見川上流のみとなる。また花見山は各時期にわたっているが、それ以外はすべて単一時期である。ここから谷本川グループでは花見山が同一場所で比較的長期の集落であるのに対し、大栗川グループでは場所を少しずつ位置を変えていたという見方もできる。

発見された土器の遺存状況は、どの遺跡においても上半部が多く、下半部が少ない。これは個体判別や文様構成を知るうえで好都合だが、反面器形確定の点では不利となる。花見山でも底部付近の破片は1割に満たず、他はなすな原1・川島谷10で各1点あるにすぎない。下半部の破片は上半部よりも概して小さく、色調はより赤みが強く、表面が班状に剥落したものが多く。これらは下半部が被熱したことを示しており、ススの付着と相まって、土器の大半が煮沸用であることを物語っている。

土器の大きさを、花見山では口径にもとづき4タイプに分けた。大きさの判明した47点の内訳は、大(25cm以上)3・中型(25～15cm)18・小型(15～5cm)25・超小型(5cm以下)1となる。すなわち口径10cm前後の小型が最多で、口径20cm前後の中型がこれに

次ぎ、両者でおよそ90%を占めている。この基準からみると、宮之前・なすな原2は大型、栗木IV・駒沢学園・川島谷10は中型で、宮之前南・なすな原1は中・小型らしい。月出松は大きさは中型だが容量の点では大型にはいり、小型・超小型が伴う。これは従来知られていた隆線文土器の傾向に合致するが、口径30cmちかい大型や5cm以下の超小型も確実に存在し、隆線文土器が各種の大きさに構成される土器群であることが明白となった。

土器の文様構成をみると、花見山1式では、広福寺にa類、多摩796にe類がある。花見山2式では、なすな原1にa・c・d類、黒川東にa類、多摩426にa・b・d類がある。花見山3式では、能見堂・宮之前・なすな原2・げんじ山・栗木IV・駒沢学園・多摩116・同125にa類、月出松にa・d類・宮之前南にa・c類がある。同じa類でも、能見堂と宮之前と栗木IV、月出松となすな原2と駒沢学園、宮之前南とげんじ山はそれぞれ類似している。ただし宮之前のような斜行隆線が、他の土器にも施されているか否かは不明である。下宿式の川島谷10はc類で、花見山118の系譜を引いている。なおこれに後続する土器群は、この地域ではまだ知られていない。

花見山遺跡出土土器の石質はチャートが半分で、安山岩・流紋岩がこれに次ぎ、3種でおよそ9割を占めている。ほかにホルンフェルス系・頁岩・砂岩なども少しあり、黒曜石はまったくない。他遺跡の石質もやはり前三者が多く、これが流域全体の傾向といえよう。

槍は鶴見川流域で126点、全体で約160点あり、その20%が花見山にある。その形態について土器を伴う遺跡の様相をみると、花見山では幅広い基部寄りに最大径をもつものが基本形で、中央付近に最大径をもつのは2点（花6・7）だけである。この2点は形態・出土位置からみて花見山3式に伴うものであろうが、その他のものは判別しがたい。月出松ではやはり幅広く基部寄りに最大径をもつものが主体となり、他に幅広く先端寄りに最大径をもつもの、それに細身で中央に最大径をもつものが花見山3式に伴う。なすな原1では細身と小型幅広い、黒川東では大型(?)・小型幅広いの2タイプが花見山2式に伴う。宮之前では小型幅広い品が、花見山3式に伴う。

このように形態は大小にかかわらず幅広くが主流をなし、細身のものが少ない。ただ加工の面からみると、細身のものは調整が全面に及んで丁寧なものが多く、主剥離面を残すもののがかなりある幅広いのものとは対称をなす。花見山1・下宿式期の様相は今一つ不明だが、花見山2・3式ではかなりのバラエティがある。単独出土品の中にはこれ以外の形態も相当みられ、それらの型式帰属を定めることはかなり困難な作業となろう。

刺槍は鶴見川流域で116点、全体で約160点あり、その3分の1が花見山である。花見山の特徴は平均の長さ3.7cm以下の小型が6割を占めることと、長さにかかわらず逆刺がきちんと作りだされていることである。その大半は遺跡内において花見山3式の分布と重なっており、同式に伴う可能性が高い。他の遺跡では長さ4cm以上の中・大型品が5割強を占め、細身で逆刺の下縁が斜行するものも多い。月出松・宮之前・宮之前南・なすな原2・

げんじ山・駒沢学園など、土器を伴う遺跡では花見山と同じ形が圧倒的に多い。これら花見山3式の遺跡で、細身が伴うのは宮之前のみである。花見山2式期のなすな原1・黒川東では、逆刺の下縁が斜行するものが伴っている。以上のことから小型で逆刺の発達したものは、ほぼ花見山3式に伴うとしてよい。やや地域が離れているが伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡(穴戸他94)も、これを裏付ける有力な事例であろう。

斧は全部で20点あり、半数弱が花見山である。磨痕が見られるのは朝光寺原東のみで、自然面を残したものも多い。形態的には比較的細身で小型品が多く、中でも花見山121・なすな原1・大塚の4点が類似している。両面加工で幅広の小山田13は他地域でも類例が少なく、大型で片面加工の宮之前南はさらに異彩を放っている。花見山の大半は1・2式の分布範囲内にあり、なすな原1・黒川東の例を加味すると、花見山2式に伴う斧は両面加工のものといえよう。これに対して月出松・宮之前南の事例から、花見山3式の斧は片面加工を主とし、明確な磨製品は見られなくなる。

それ以外の器種は、極めて数が少ない。花見山の鍬は基部が直線的で宮之前が類似し、月出松・能見堂・黒川海道ではいずれも凹んでいる。花見山の三角鍬は刺槍と共存しており、それぞれ独自の存在である。ただ花見山3式期になると、形態に変化が生じてきたということであろう。鍬は宮之前・黒川東にあり、いずれも剥片を利用している。搔削器は能見堂・駒沢学園・東希望ヶ丘・蔵屋敷にあり、剥片の周縁を加工している。東希望ヶ丘の厚手の先刃と、花見山169・170などの刃部は類似している。なすな原1・中里には細石刃、花見山・亀井には細石核があるが、他の石器群との共伴を積極的に主張しうるほどの例に恵まれていない。

4. 花見山の背景

以上見たように、都筑の先土器時代末から縄文時代草創期の遺跡は、面積に比してかなり多く存在する。しかし把握できたのはその一部にすぎず、むしろ消失あるいは未知の遺跡が相当数存在することが想定される。そうした中で、花見山はどのような位置を占めていたのであろうか。

各遺跡は台地の主脈よりも先端・斜面などに、集落は低位部分に立地している。こうした状況は集落の形成が本格的に開始される縄文時代早期よりも、それ以前の先土器時代遺跡の立地を踏襲している。しかし先土器時代末期の本地域の様相は、必ずしも明らかではない(坂本他95)。遺跡はかなり長期にわたって形成されたものであろうが、これらを残した人の動きは予想以上に頻繁であったことが察知される。

ただしそれらを時間軸で区切ってみると、各時期の集落はさほど多くない。花見山1式期には鶴見・大栗川流域に各1つずつであり、2式期になると恩田・三沢川にも出現し、

3式期になるとそれぞれの流域に拡大する。そして下宿式期になると、ほとんど消滅してしまうのである。こうした流れが本地域特有のものかそれとも普遍的なものか、隣接地域あるいは広範な地域と比較する必要がある。それによって各々の地域的特質が浮き彫りにされ、ひいては列島の巨視的な流れが確認できるからである。

遺物の面では槍と刺槍が合わせると300点をこえ、この時期の主体的な石器であることがわかる。他の器種にしても石質や形態が特徴的で、前後の時期に混入しても判別でき、この割合がブロックでないことは確実である。これらと共存する土器はすべて隆線文土器で、合計150個体以上が出土している。したがって本地域のこの時期を特徴付けるのは、何とんでも2種の槍と隆線文土器の存在であろう。「槍と土器」と称した所以である。

前述のように時期区分の基準をなす土器は、花見山1→花見山2→花見山3→下宿の4型式に細分できる。しかしこれらに伴う石器は、各器種ともかなりバラエティがあり、単独出土品はさらに多彩である。したがってこれらをどの段階に入れるかは、かなり困難をとまなう。土器伴出の石器群が、その時期のすべてを包括しているかどうか保証されていないからである。ただ後続する押圧縄文土器群の存在はいまだ知られていないので、下宿式よりも新しい段階の石器ではなく、伴うかそれ以前の所産であろう。

さらに問題なのは単独出土品のなかに、この地域で製作されたと見られる石器がほとんどない点である。石器が製作地の周辺で使用されたとすれば、接合関係は確認できなくとも、同形態の製品がみられるはずである。花見山の槍の主要なものはいわゆる「横倉型尖頭器」(永峰83)に属するが、鶴見川流域で花見山の槍4・5に近い形態は百崩・三矢田・今井谷戸にある。全体の長さは異なるが、二ノ丸・西原も基部が類似している。しかし三矢田・今井谷戸・西原などは、槍が多く製作される多摩丘陵・相模野台地に隣接しており、そちらとの関連を無視できない。そうすると花見山で作られた可能性が高いのは、百崩・二ノ丸位に過ぎなくなってしまう。

こうした事情は、刺槍でもまったく変わらない。なすな原1・宮之前南でも石器製作がなされているので、その周辺は同グループと関連づけるのが妥当である。したがって花見山製作の石器と関連する範囲はおのづからしぼられ、鶴見川下流北岸を中心とする地域となる。また南隣の能見堂でも作られていたのだから、この地域のより小型のタイプは能見堂製であることも考慮しなければならない。とすれば花見山に近い刺槍としては、石原・西ノ谷貝塚の一部をあげるにとどまる。花見山にしても能見堂にしても多数の剥片が出土しており、相当数の石器が製作されたとみることができる。

筆者はこの時期の遺跡を、生活址(集落)と生産地(猟場)ととらえ、地域における相関関係を想定してきた(坂本86b)。神奈川の有舌尖頭器を集成した白石浩之は、上記に石器製作址を加え、「消耗品」の「有舌尖頭器」は「製作址で計画的に多量に製作していた」と推定し、「生活址を中心として石器製作址と消費地(狩場)を結ぶ領域が設定され

る」と述べている。また湘南藤沢キャンパス内遺跡の分布状況をもとに、「明らかに拠点的な集落と狩場が有機的に関連している」という（白石92）。しかし具体的な領域や関連については、論が及んでいない。

湘南藤沢キャンパス内遺跡をまとめた桜井準也は、有茎尖頭器を遺物集中部内と遺物集中部外に分けた。前者を「集落ないし短期間に営まれたキャンプ」、後者を「当時の狩場」と性格づけるが、使用石材のちがいから前者の住人とは「異なった人々」が利用していたこともあるという（桜井93）。同遺跡から出土した69点の有茎尖頭器は13タイプに分けられているが、どの地点にあっても形態的類似性は極めて高い。そこから前者で製作された石器が、後者で使われたと考えるのは妥当であろう。

以上の見方は槍・刺槍を狩猟具ととらえ、製作と使用が同一地域内で行われていたという前提に立っている。ところが鶴見川流域の状況は、必ずしも湘南藤沢キャンパス内遺跡と同一視することができない。しかし3でみたようにこの地域の槍・刺槍は多様であり、その製作地をこれまで知られた流域内の遺跡に求めることはかなりむずかしい。石器からみた花見山集落の存在は、鶴見川流域において思いのほか孤立的なのである。それは前述の前提をあらためて検討しなおす必要がある事を物語っている。

花見山の突出ぶりは土器についても同様で、他の遺跡からみれば数10ヶ所分もの量を有している。最も多い2式は85個体もあり、平均より多いなすな原1の10倍にも達する。大小の器形が組み合わさっている点は同じだが、個体数の差が多すぎる。これは単に「営まれた時間が長かったから」という説明だけでは、納得できないように思われる。

佐藤宏之は後期旧石器時代から縄文時代への移行にあたって列島各地での対応状況が同じではなく、関東地方では「北方系削片系細石器石器群を媒介と」して「内水面漁撈」の開発が採用されたという。サケ・マスの骨が出土した前田耕地遺跡を「漁撈キャンプ」と位置付け、「土器の使用もふくめて、火を使った食物の処理や保存処理技術を相当高度に発達させており、同時に貯蔵技術も開発していた」と考えている（佐藤92）。生活基盤の第一を狩猟とすれば、第二の漁撈を加えることによって「定住化」がもたらされ、縄文社会への移行につながったという道筋である。また栗島義明は神子柴文化の役割について、「限定的であった漁労活動を生業部門に取り込むことによって、人々の生活はより安定の度合いを増し、大きく縄文時代への傾斜を強めていった」と強調している（栗島95）。メドヴェージェフは極東ロシアの出現期土器を「魚油容器」と位置付け、やはり定住生活への移行にあたって漁撈が重要な役割をはたしたと考えている（メドヴェージェフ93）。

これらの考え方は、いうまでもなく「縄文時代のサケ・マス論」（山内64）の延長線上にあり、花見山遺跡を理解するうえでも大変魅力に富んでいる。縄文海進以前の鶴見川は多摩川に流入しており（増子他88）、多摩川を溯上するサケ・マスの一部が鶴見川に及んでいたことは当然考えられるからである。両川合流点から花見山までの距離は前田耕地遺

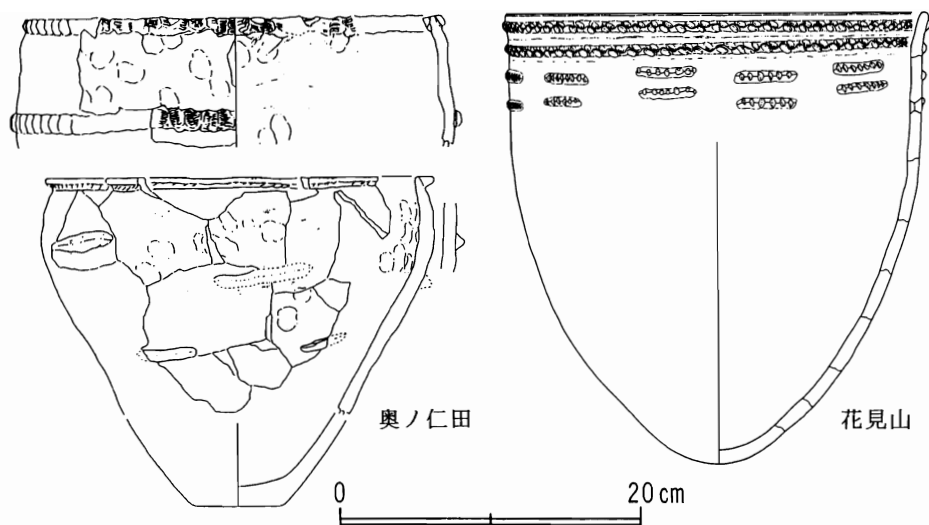


図13 南九州と南関東の土器

跡までよりもかなり近く、条件としてはむしろ有利といえよう。ただ花見山の立地はさらに支谷の源頭部で、そこまで溯上が及ぶかどうか検討の余地がある。前田耕地と同様な立地を求めるとすれば、本流沿いのさらに低い段丘であろう。しかしそこは一部が沖積層下に埋没していることもあり、この時期の遺跡はほとんど知られていない（坂本93）。もしこの面に「漁撈キャンプ」があるとすれば、花見山はそれらの背後に位置した「本集落」ということになるうか。

しかし花見山では北方系削片系細石器が伴っておらず、また各遺跡の土器は2～3個体にすぎない。これが漁撈集落の一般的な在り方とすれば、花見山の個体数の多さはどう理解すればよいのだろうか。

そこで隆線文土器をもつオープンサイトという視点から列島に目を広げてみると、花見山の様相は本州よりも南九州の諸遺跡に類似している。鹿児島県掃除山・柁ノ原・奥ノ仁田・宮崎県椎屋形第1・堂地西遺跡などでは、数100～1000点前後の土器が発見されている。遺構は住居跡・配石炉・集石・土坑・煙道付炉穴などで、他地域に見られないものを含んでいる。掃除山の石器は、石鏃・細石核・磨石・敲石・凹石・ハンマーストーン・礫器・石皿・砥石・石斧・剥片石器・線刻礫・石核・ピエスエスキューユ・スクレイパーがある（宮崎考古学会93）。また柁ノ原遺跡では、丸ノミ形石斧が伴っている（伊地知他94）。これらの遺構・遺物をもとにして、採集を基盤とした定住の開始が主張されている。

南九州の土器は平底を主としており、器形は大・中・小の各種から構成されている。奥ノ仁田遺跡では隆帯（太隆線）が口縁に平行して1～3条めぐらされ、指頭・ヘラ状工具・二枚貝腹縁などで加飾されている。隆帯は上下をつなぐ縦方向もあり、また胴上部に長さ

数cmの隆帯を横方向に貼付したものがみとめられる（宮田95）。こうした文様構成は器形のセットと共に、花見山1式のそれを彷彿とさせる（図13）。

以上のような堅穴の存在や土器要素の類似は、それらの基盤をなす生産様式が共通していたためとも考えられる。要するに多数存在する花見山式土器群の背景として、「植物質食料の採集」が想定されるのである。土器の一部を植物質食料の加工・調理用具、比較的多い打割器もこれに関連した用具として考えたい。なすな原と共通し前田耕地とは異なる立地も、植物質食料の採集・加工の適地だからという見方もできる。「第一の狩猟」と「第二の漁撈」に「第三の採集」を加えることによって、立地や遺物の様相がより正しく理解できるのではあるまいか。現段階において土器が採集をものがたる絶対的な証拠とは断言できないが、花見山人の生業活動は決して一面的ではなかったように思われる。

周知のように東京－鹿児島間の陸上距離は約1500kmあり、徒歩2～3ヵ月で到達できるという（日本歩け歩け協会・井上他81）。条件がより劣悪であれば日数をもっと必要とするのは当然であるが、少なくとも季節内移動が可能という点に変わりはない。したがって文様・器形構成の類似をもたらした要因として、人の移動を想定したとしても何ら不思議ではなからう。花見山2式土器の中には、日向・上黒岩・福井と同一の文様構成をとるものがある（坂本他95）。こうした隆線文土器の広域性も、単に文化伝播という言葉だけでは片付けられない。中世以前における列島内外の人の動きは、今日想像するより遥かに広範囲だった。花見山から奥ノ仁田までは、壬からグロマトゥハまでよりも近いのである。

この移動は決して一方的なものではなく、普遍的かつ回帰性のあるものと思われる。広域移動の視点からこの時期に多いデポ（石器埋納）の存在をみると、その意義がより鮮明に浮かび上がってくる。デポはこうした移動生活の中で、あるグループの中継点として明確に位置付けられていたのではあるまいか。

このように花見山遺跡の背景を考えてみると、関東地方ではもっとも早く縄文化を達成した集落ということができよう。ただし周囲の遺跡あるいは後続する遺跡に、こうした様相は見られない。あたかも狩猟・漁撈の島に浮かんだ、採集の「島」であるかのごとくである。こうしたモザイク状況そのものが、いまだ明確な定住をなしえなかった草創期社会の本質であるように思われる。いずれにしても今の段階ではこれに関する適確な見通しを持ち合わせていないので、さらに多くの視点から検証をふかめたいと思う。

* * *

小文作成にあたり、御協力いただいた下記の方々に、深謝いたします。

伊丹 徹・小葉一夫・小宮恒雄・重久淳一・鈴木重信・館野 孝・戸田哲也・新津 健・浜田晋介・村田文夫・持田春吉・渡辺 務・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

(1996年1月31日)

参考文献

- ・相原俊夫 1988 『三枚町遺跡』
- ・浅川利一 1974 『町田市史』上巻
- ・浅川利一・大坪宣雄 1984 『川島谷遺跡群』Ⅰ・Ⅱ
- ・浅川利一 1990 「縄文土器復原の技術とところ」『多摩考古』第20号
- ・麻生順司 1989 『三輪南遺跡群発掘調査報告書』
- ・安孫子昭二 1983 『小山田遺跡群』Ⅱ
- ・荒井幹夫 1974 「東方第7遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』Ⅳ
- ・安藤広道・鹿島保宏・鈴木重信 1992 『大口台遺跡発掘調査報告』
- ・池谷信之 1990 『成瀬西遺跡群』
- ・石井 寛 1990 『山田大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅺ
- ・石橋峯幸 1987 「No.382遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和58年度第2分冊
- ・伊丹 徹・河野喜映 1988 「長津田遺跡群宮之前（No.1）遺跡D地区」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報』7
- ・伊丹 徹・河野喜映 1989 「宮之前（NO.2）遺跡」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報』8
- ・伊地知治喜・上東克彦・福永裕暁・雨宮瑞生 1994 『柗ノ原遺跡』
- ・伊藤 郭 1990 「八幡山遺跡」『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅹ
- ・伊藤 健・今井恵昭・小島正裕 1991 「No.3遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』平成元年度第3分冊
- ・伊藤恒彦 1991a 「大久保遺跡」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅴ
- ・伊藤恒彦 1991b 「三矢田遺跡―遺物・考察編―」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅵ
- ・稲村晃嗣・小栗一夫・村田文夫 1980 『黒川東遺跡』
- ・井上智勇・他 1981 『中学社会・歴史的分野』
- ・今村啓爾 1973 『霧ヶ丘』
- ・江坂輝弥・浅川利一・岡島 格 1978 「なすな原遺跡出土の細隆起線文土器」『考古学ジャーナル』No.147
- ・大坪宣雄 1987 『金井原遺跡群』Ⅰ
- ・大坪宣雄 1994 『日吉団地遺跡』
- ・岡本 勇・和島誠一 1958 『横浜市史』第一巻
- ・奥平一比古 1980 「横浜市旭区上白根町採集の有舌尖頭器」『神奈川考古』第9号
- ・小野寺恵子 1986 『東希望ヶ丘遺跡』
- ・禿 仁志 1974 『栗谷遺跡』
- ・川田壽文 1995 「No.789遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』平成4年度第3分冊
- ・北川吉明 1990 『利倉貝塚』
- ・栗島義明 1995 「日本列島における移行期の文化」『東アジア・極東の土器の起源』
- ・呉地英夫 1989 『駒沢学園校地内遺跡』
- ・小池 聡 1986 『国道246号線西原遺跡』
- ・小栗一夫 1984 『戸場遺跡』
- ・小栗一夫 1991 『黒川地区遺跡群報告書』Ⅲ
- ・小杉 康・鶴田典昭 1989 「日影山遺跡」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅳ
- ・小宮恒雄・山口隆夫・石井 寛 1984 「横浜市能見堂遺跡の調査」『第8回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

- ・小宮恒雄 1990 「月出松遺跡」『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅹ
- ・根田信隆 1980 「緑区の遺跡分布調査中間報告」『都筑文化』1
- ・近藤真佐夫・宮重俊一 1989 「げんじ山遺跡」『上恩田の遺跡』
- ・桜井準也 1993 「縄文時代草創期前半の有舌尖頭器の平面分布について」『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第1巻
- ・坂本 彰 1970 「港北における原始古代研究への視点Ⅰ」『港北のむかし』2
- ・坂本 彰 1972 「東方第7遺跡」『東方第13遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』Ⅲ
- ・坂本 彰・鈴木重信 1979 「神奈川県花見山遺跡」『日本考古学年報』30
- ・坂本 彰 1985 『三の丸遺跡調査概報』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅵ
- ・坂本 彰 1986 a 「最古の縄文土器」『古代のよこはま』
- ・坂本 彰 1986 b 「百崩遺跡」『亀ノ甲山・オオデラ・百崩』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅷ
- ・坂本 彰 1987 a 「七ツ塚遺跡」『七ツ塚・権田池東遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅸ
- ・坂本 彰 1987 b 「縄文時代における二つの道」『利根川』8
- ・坂本 彰 1987 c 「横浜市西ノ谷貝塚」『第11回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- ・坂本 彰 1989 「朝光寺原東遺跡採集の丸ノミ形石斧」『調査研究集録』第6冊
- ・坂本 彰 1993 「横浜市緑区川端向遺跡採集の石器」『利根川』14
- ・坂本 彰・鈴木重信・倉沢和子 1995 『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅥ
- ・坂本 彰 1996 「花見山式土器とその周辺」『かながわの縄文文化の起源を探る』
- ・笹井一正・先崎忠衛 1985 「町田市下小山田町出土の大型石槍」『多摩考古』17
- ・佐々木洋治 1971 『高島町史』考古資料編
- ・佐々木洋治 1973 「山形県における縄文草創期文化の研究」『山形県立博物館研究報告』第1号
- ・佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』第29号
- ・穴戸信吾・立川直之・松田光太郎・三瓶裕司 1994 「東海第一自動車道No.14（三ノ宮・下谷戸）遺跡」『第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- ・白石浩之 1992 「有舌尖頭器の分布とその問題点」『神奈川考古』第28号
- ・関根唯充 1989 「山王坂遺跡」『真光寺・広袴遺跡群』Ⅲ
- ・先崎忠衛 1978 『恩田川流域における考古学的調査』（2）
- ・先崎忠衛・日暮晃一 1982 「東京都町田市けぞう谷遺跡出土遺物について」『多摩考古』15
- ・竹石健二・澤大多太郎・野中和夫 1989 『岡上丸山遺跡発掘調査報告書』
- ・武井則道 1994 『大塚遺跡－遺物編－』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ
- ・館野晶子 1984 『小山田遺跡群』Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ
- ・館野 孝 1989 「多摩丘陵の尖頭器」『槍の文化史』
- ・谷本靖子 1993・94 『黒川地区遺跡群報告書』Ⅲ・Ⅳ
- ・辻本崇夫 1986 『築田寺南遺跡』
- ・寺沢 薫 1975 「多摩丘陵西端部採集の石器2例」『古代学研究』第75号
- ・東京都埋蔵文化財センター 1992 『縄文誕生』
- ・東原信行 1975 「川崎市高津区末長久保台発見の有舌尖頭器」『川崎市文化財調査集録』10
- ・東原信行 1978 「川崎市多摩区菅発見の有舌尖頭器」『川崎市文化財調査集録』13

- ・戸田哲也・相原俊夫 1984 『大和市月見野上野遺跡第2地点』
- ・永峰光一 1983 「横倉遺跡」『長野県史』考古資料編
- ・中村喜代重 1978 『なすな原近隣遺跡報告書』
- ・中山 豊 1992 『葦屋敷遺跡発掘調査報告書』
- ・橋本昌幸 1988・91 『都筑自然公園予定地内遺跡群』・同(2)
- ・浜田晋介 1995 「岡道孝コレクション」『川崎市市民ミュージアム収蔵品目録』考古資料第1集
- ・原川雄二 1987 「NO.5遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度第2分冊
- ・原田昌幸 1980・81 『藤の台遺跡』Ⅱ・Ⅳ
- ・原 宏美 1989 「川崎市中原区井田伊勢台発見の有舌尖頭器」『川崎市市民ミュージアム紀要』第2集
- ・樋口清之・麻生 優 1971 「十三菩提遺跡」『埋蔵文化財調査報告』2
- ・平子順一・鹿島保宏 1989 『観福寺遺跡・新羽貝塚』
- ・増子章二・浜田晋介 1988 『川崎の考古』
- ・増田精一・後藤 健 1978 『栗木IV遺跡』
- ・町田庸子 1984 『なすな原遺跡-No.1地区調査-』
- ・松村恵司 1974 『神庭遺跡』
- ・三浦圭介 1988 『表館(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
- ・南大谷遺跡調査団 1981 「南大谷稲荷山遺跡」『町田市埋蔵文化財発掘調査年報』1
- ・宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会 1993 『南九州の縄文時代草創期の諸問題』
- ・宮田栄二 1995 「九州南部の土器出現期」『東アジア・極東の土器の起源』
- ・村田文夫 1963 「神奈川県出土の有舌尖頭器」『上代文化』第33輯
- ・村田文夫 1968 a 「神奈川県川崎市生田広福寺境内採集の隆起線文系土器片について」『古代文化』第20巻第2号
- ・村田文夫 1968 b 「多摩丘陵最東端における有舌尖頭器二例」『古代文化』第20巻第8・9号
- ・村田文夫・増子章二 1978 「川崎市多摩区黒川海道遺跡採集の石器群」『神奈川考古』第3号
- ・森田金吾 1973 「川崎市子母口貝塚出土の石槍」『考古学ノート』第3号
- ・矢内 勲 1986 「地藏堂遺跡群A地点」『奈良地区遺跡群』Ⅲ
- ・矢島國雄 1980 「横浜市神奈川区羽沢町採集の槍先形尖頭器」『神奈川考古』第9号
- ・山内清男 1964 「縄文式土器・総論」『日本原始美術』1
- ・横浜市下水道局河川計画課 1992 『鶴見川』
- ・渡辺康行 1986 「No.11地点 受地だいやま遺跡」『奈良地区遺跡群』Ⅰ上巻(第1分冊)
- ・V・E・メドヴェージェフ 1993 「ガーシャ遺跡とロシアのアジア地区東部における土器出現の問題について」『環日本海における土器出現期の様相』